

ペンとカメラの北京・東北紀行



の北京・東北紀行

荒野に開発された大慶油田 ■ 西園寺 公一 ■ カメラ南村志郎

ペンとカメラの^{ぺきん}北京・^{とうほくきこう}東北紀行
——荒野に開発された大慶油田——

昭和47年11月10日 第1刷

著者 ^{さいおん じ きんかず}西園寺公一
^{みなみむらしろう}南村志郎

発行者 松田延夫

発行所 読売新聞社

〒100 東京都千代田区大手町 1 - 7 - 1

〒530 大阪市北区野崎町77

〒802 北九州市小倉区明和町 1 - 11

印刷 凸版印刷株式会社

製本 凸版製本株式会社

定価 1,000 円

0095-701120-8715

©, Kinkazu Saionji, Shirô Minamimura, 1972



定着した文化大革命

5

香港から国慶節の北京へ

6

紅衛兵の哈爾浜から五年経って

21

農場に定着した知識青年

34

自動車工場のホンコツ機械

51

荒野の鉄人——大慶油田の誕生

59

「鞍鋼憲法」とは？

79

日本軍国主義の爪あと

81

生き地獄・西安炭鉱

82

平頂山の虐殺

94

細菌兵器製造の罪悪

107

漢方医学の発掘と発展

121

鍼麻酔の手術

122

聾啞の治療と「生体実験」

130

小児麻痺後遺症の治療

142

湯崗子温泉

145

大連の地下道網

149

西崗区の紅衛小学校

150

「開け胡麻」の遼寧賓館

161

野菜売り場から出た中央委員

168

新しい二つの北京

171

北京二七機車車輛廠の変遷

172

脱皮する北京大学

197

あとがき

215

装丁 重原保男

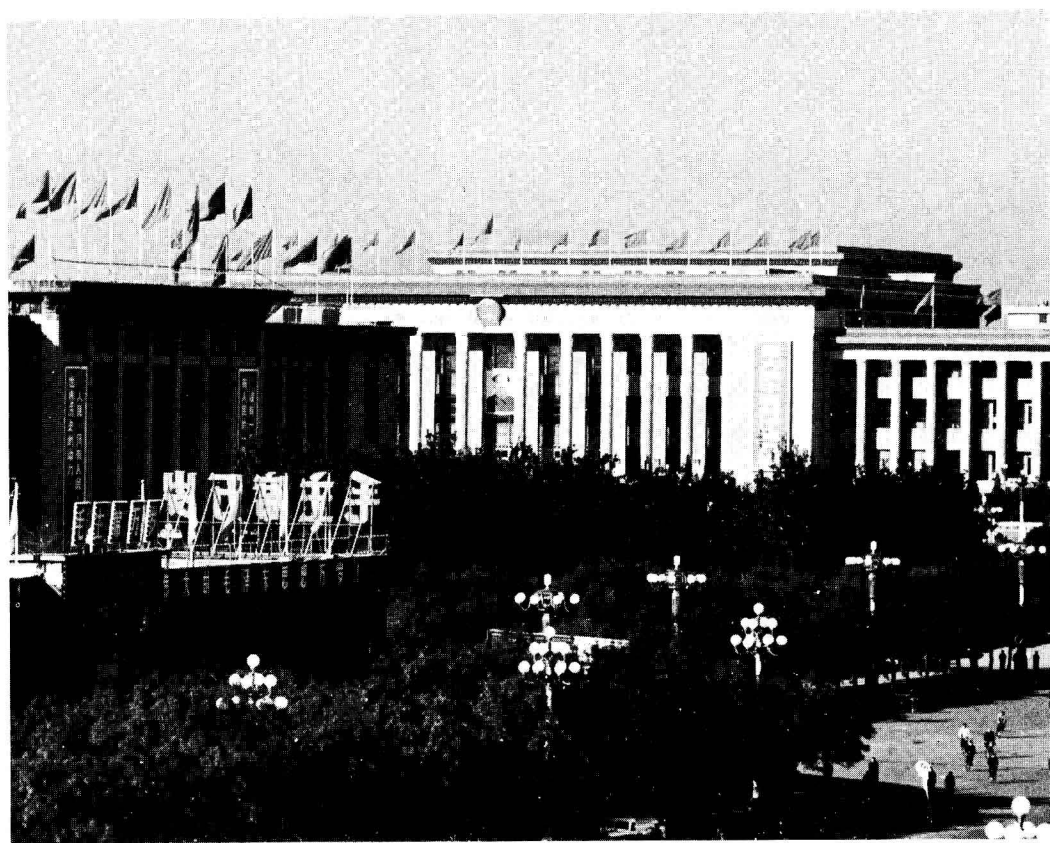
定着した文化大革命

香港から国慶節の北京へ

羽田空港を日航のジャンボで立って香港に向かったのが、昨年、一九七一年の九月二十四日だった。じつは昨年早々、メーデーか、国慶節にいらっしやい、と中国側からの招待があり、メーデーに行こうかと思っているうちに、中国の大型の卓球代表団の来日が本決まりになった。そのため、メーデーの中国行きをあきらめて、国慶節の祝典参加となった次第である。

・昨年の夏、十三年近く住みなれた北京を引き上げて帰ってきていろいろ、もう一年あまり経つ。中国の社会主義革命、社会主義建設のテンポはまことに速いので、一年以上も中国の息吹きを肌^{はだ}に感じないと、せっかく十三年近くものあいだに少しずつ理解を深めたつもり^の中国の姿を見失ってしまいそう^で心配なのだ。

ところで、今度の訪中は、長らく国際社会から村八分にされてきた中国の存在が、国際政局のなかで再認識、再評価されざるを得なくなった時期に当たっていた。国連復帰の問題がすでに差し迫った時間表にのっている時期であり、ニクソン訪中の露払いキッシンジャーは、着々と準備態勢をととのえつつあった。こういう問題は、もちろん香港でも関心の的であったが、内外の報道陣は、この一点になみなみならぬ強い関心を示した。ある英字新聞の



国庆节の当日 「歴史博物館」(手前)と「人民大会堂」(右)

記者は、粘り強く私を追い回した末、私にこう聞くのだ――

「サイオンジさんは、北京の事情に精通されているはずですが、いま北京では、政治的混乱が起こっているではありませんか。毛沢東、周恩来にたいする造反が起こっているのではありませんか。林彪ですよ。人民日報に林彪の名がぜんぜん出ない。集会からも、宴会からも、儀典からもまったく姿を消してしまった。『毛主席のもとでも親密な戦友』は、いったいどうしちゃうたんです。粛清されちゃったんじゃないですか」

日本のブン屋さんたちからも、似たりよったりの質問が出た。この問題にまつわるいろいろの噂は、私の耳にもはいっていた。いろいろの無責任な、興味本位の臆測おくそくがおこなわれているのも知っていた。しかし、私自身は、根拠のない、無責任な、主観的な臆測は嚴格に慎しむことにしている。なぜならば、こういう臆測は、われわれの悲願とする日中友好を進めるうえに、なら貢献しないばかりでなく、かえって妨げになるばかりだからだ。中国は、かならず適当な時期に、事の真相を明らかにするのだから、それまで待てばいい。

もっとも、林彪の蒸発で、日中関係になにかマイナス面でも現われてきたというのであれば、別だが、そんな気配はいささかも感じられない。文革の一段落した今日、中国の対日政策は、各分野で一貫して、いっそう積極的に進められているのだ。

ただ、英字新聞の記者の「粛清されちゃったんじゃないですか」という質問だけには返事ができると思う。



天安門前で国慶節を祝う人たち

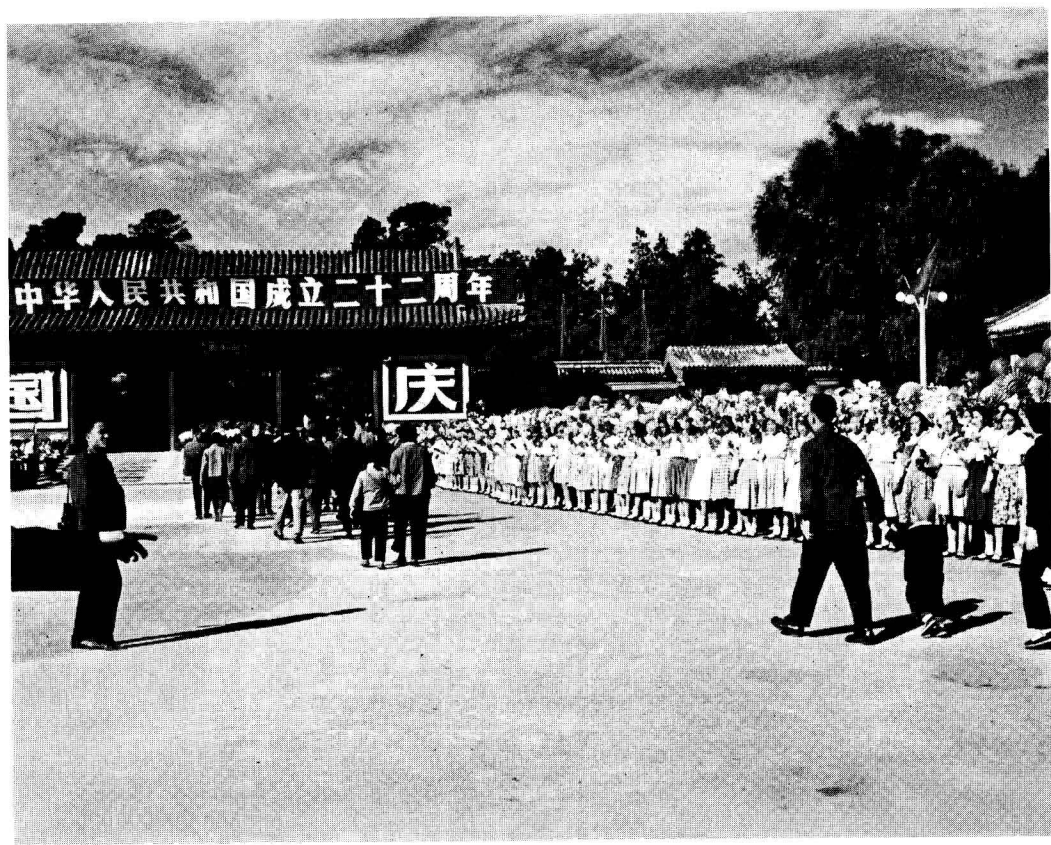
林彪は、失脚したにしても、消されてはいないだろう。ソ連が革命のいろいろな段階でやったような粛清——血の粛清などということは、中国では流^は行^やらない。毛沢東思想にないのだ。「病をなおして、命を救う」のが毛沢東思想なのだ。政治的、思想的な誤りを犯した者も、葬り去ってしまえばいいというのではなく、思想を正しく改造し、正しい政治路線に戻し、祖国の社会主義革命、社会主義建設の戦線に復帰させるための努力を、みんなどことんまでする。これが毛さんの考え方なのだ。これが実践されたからこそ、激しい文革のなかでも血の粛清はなく、劉少奇さえ殺されてはいない。

さかのぼって言えば、日本帝国主義の傀儡^{かいらい}、「満州国皇帝」愛新覚羅溥儀も処刑されずに、戦犯収容所で思想改造に努力し、一九五九年から、六九年に癌^{がん}で亡くなるまでの十年間、北京市民として、平和な、安定した生活を送っていたのを、私はよく知っている。林彪がどういう過ちを犯したのか、どうか、私は知らない。しかし、過ちを犯したにしても、粛清されたなどということは、私には考えられないのである。

香港に二泊して、九月二十六日に入境する。広州に一泊、と胸算用していると、迎えにきてくれた韓さんが、

「おさしつかえなければ、広州の駅からすぐ飛行場へゆき、北京へ直行しましょう。明日はバッタしかないんですよ。飛行機は三時出発なんです、一時間待ってもらうように話がついています」という。

ありがたい話だ。バッタではたまらない。バッタというのは、ソ連製の双



分散会場の一つ頤和園（万寿山）正門での歓迎風景

発小型機イル14のことで、広州を立つと、長沙、武漢、鄭州、それからやつと北京につく。バッタのごとく小さきみに跳んでは下り、跳んでは下りたりするためのニックネームである。

八時少しまえに、夜のほとぼりのすでに下りた北京空港着。大ぜいの友人たちが出迎えてくれる。松村謙三老の葬式に参列してくれた王国権さん、旧友の張香山、肖向前らの諸君、ビンボン外交代表団の趙正洪団長、「王旋風」の王曉雲君、平和委員会、中日友好協会、AA作家会議、AAジャーナリスト協会の友人たち、北京在住の日本の友人たち、日中記者交換で駐在している記者諸君、それから溥傑夫妻——夫君は前述の「満州国皇帝」の弟、夫人はかつての嵯峨侯爵家の出……みんな懐かしい顔ばかりである。

「西園寺さん、あそこにあるスローガンに気がつきましたか。キッシンジャーが北京に着いて、なによりも先にみたのはあれでしょうよ。ハッハッハ……」と、孟さんが、飛行機の到着を大手をひろげて待ち受けているかっこうのスローガンの巨大なパネルを指さす。気がつかなかったのだが、いままで見たことのないような巨大なパネルだ。なにが書いてあるのだろう。ニクソン大統領の訪中にたいする歓迎の言葉でも書いてあるのかな、と思って、見直すと、眩いほどの電灯の光を浴びて、パネルの赤地に浮き出している真の白な大文字は、なんと——

「アメリカ帝国主義とその手先どもを打倒しよう」と呼びかけていた。ニクソンの訪中決定については、自分自身のグズを棚（たな）にあげて、「頭越し」と怒った者もあるし、中国が柔軟化してアメリカと妥協することを警戒した



国庆节を踊り祝う人たち（順和司）

り、糾弾したりするムキもあった。いずれも見当外れである。なるほど忍者キッシンジャーは丁重に、いや、むしろ温かく迎えられ、忙しい周恩来総理は二十時間という長時間を割いて会談した。それだからといって、中国が柔軟化して、アメ帝と妥協することはない。中国は決して原則を曲げはしない。文革の一段落した今日、原則の適用に融通性がでてきたのは確かだ。これは、文革による毛沢東路線の勝利、定着、滲透しんとくによって生まれた確信の結果だと思う。私は北京空港のあの巨大な「打倒美帝国主义」（アメ帝を打倒しよう）のスローガン・パネルを見て、ますますこの感を深くするのであった。

国慶節前後の中国は、どこへいっても、慶祝のムードが漂っていて楽しい。それは決して派手な、浮わついた、お祭り騒ぎのムードではない。それは旧社会の惨めな人生のなかから立ち上がって、新中国をつくり、自らその主人公となった七億人民の心の底からこみ上げてくる、しっとりとした喜びのムードに他ならないのである。北京飯店、新僑飯店、民族飯店、前門飯店など目抜きのホテルに溢あふれるほどの外国のお客さんたちも、まことにうれしそうだ。昨年は、中国にたいして急速に前向きになりつつあった国際情勢を反映して、外国からの客人はいままでにないほど多かった。アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ、オーストラリア、ヨーロッパのほか、北アメリカからの客人も少なくなかった。そして、それぞれのお国ぶりで喜びを表わしていた。

アメリカの各地方の大学から選ばれてきたという学生代表团には長髪族が